

図書紹介

家族会員 大野敏明 著

『産経新聞 風雲録』

大東 信祐 自57

現在のマスコミの世界では自称リベラル派が主流をなし、保守的な言論は数少なく、自派に不利な事象に対しては小さく報道したり、「報道しない自由」を行使したりしている。

敗戦後の混乱期に占領軍の指示に基づいて作られた「憲法」を後生大事に信奉し、世界情勢の変化に目を向けることなく、これを検討することすら拒否する論者が大切にされていくのは奇妙であると言わざるを得ない。

いわゆる「従軍慰安婦」問題で虚報捏造を繰り返し、20年以上も垂れ流しにしてきた朝日新聞が、日本のクオリティーパーを名乗る異常さを考えれば、「右翼」「保守反動」「政権のちようちん持ち」等と云った攻撃を受けながらも保守的な論調を堅持してきた産経新聞は日本にとつて貴重な新聞であったと言つて良いのではないか。

本書で雫石事件について触れられている。当時私は朝霞で中隊長として勤務していたが、事件直後に中隊の隊員に、「航空路」は鉄道線路とは異なり、旅客機の飛行経路、高度を指示したものであり鉄道線路のように、他の航空機の立ち入りを禁じたものではないこと、戦闘機より旅客機の方が優速であること、飛行中の

戦闘機に旅客機が衝突したものであり、自衛隊機が旅客機に衝突したものではないと繰り返して説明したことが改めて思い出される。

本書は新聞人としての著者の41年8カ月におよぶ苦闘の記者生活からあぶり出す波乱万丈の物語である。

各地の支局勤務時代に積み重ねた記事作成の御苦労は昭和50、60年代にテレビで放映された後に映画化された「事件記者」を髣髴とさせる。大手マスコミ相互の激しい競争の実態、地方記事を充実させるための地域マスコミとの競争等は興味を引く内容であり、新聞に掲載される一本の記事において、単に当局（官庁等）の発表を掲載するだけではなく、平素からの関係者との密接な人間関係、問題点に関する関心と情報の累積があつて初めて読者の心を打つ記事が作られることを改めて知ることが出来た。

また、県単位で発行されている地方紙と中央紙との地域報道をめぐる競合、東京から各新聞社に配信される通信社の記事の重要性についても注目を要することが記述されている。

また、支局等の小所帯における内部の人間関係の軋轢等について述べられているが、何れの組織においてもこの要素は存在するものである。その中において著者の苦労がユーモアを含めて記述されているのは、掲載される記事のバックグラウンドとして人間臭さと親しみを感じさせる。

(株) マガジンランド社刊

〒102 0074 千代田区九段南3-45

電話 03-6910-0771

価格 1500円＋税